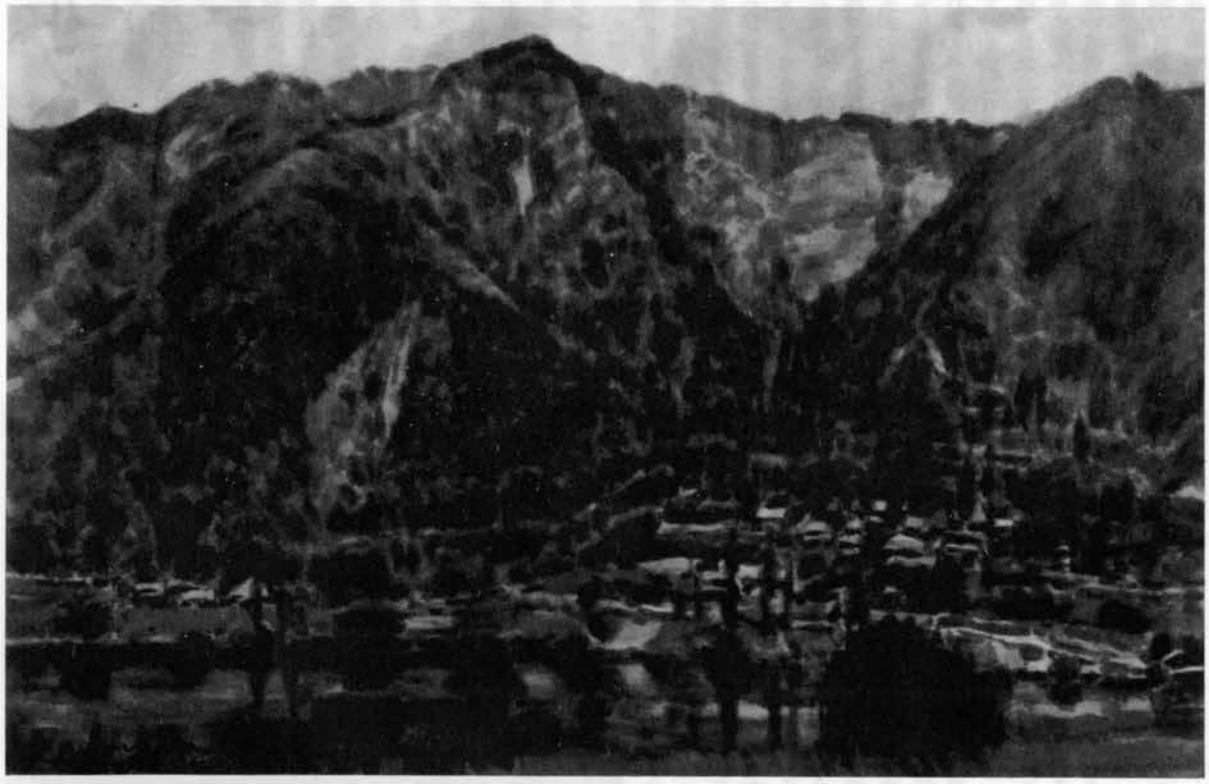
山と博物館

第32巻 第7号　1987年7月25日　大町山岳博物館

特集　不破章水彩画展（7/19～8/23）



山湖（木崎）　不破章作　大町市蔵

不破章水彩画展の開催

不破章先生が逝去されて、今年は十年目に当たる。

先生は一九六〇年代から七〇年代にかけて、名実ともに日本水彩画壇の第一人者であった。「日本水彩画壇を背負う三人の一人…」などという表現もよくきかれた。

先生は、日本洋画壇の巨匠、石井柏亭先生に師事されている。

堅実な写実主義に徹せられ、伝統の透明水彩画法で終始された。その作品への評価は絶対なものであった。

そして潔癖な先生は、その生涯、家庭生活のための費用は他に求めて、自作絵画をもって生活の糧にはなさらなかった。

だから、所属していた日展、一水会、日本水彩画会などの各展に出品された作品をはじめ、ほとんどの作品が自宅アトリエに遺されていた。

逝去後、久羅夫人の手で千葉県立美術館、大町市、信濃美術館などにその代表作品のほとんどが寄贈されているのである。

先生の師の石井柏亭先生が、戦中戦後に松本に疎開されたこともあり、度々足を信州に運んでおられたこともあったろうか、信州と信州の風景をこよなく愛され、よく写生されている。

今回の作品展には、信州を描いた作品が五十点もあるのである。このほか、日展出品作三点、一水会出品作七点、日本水彩画会出品作五点なども加わり、信濃美術館の協力を得て実に一〇〇点を越す作品群で、不破芸術のすべてが鑑賞できると言っても過言ではないのである。

どうか、この機会に是非々々、足を運んで鑑賞していただきたいのである。

（石沢　清）

不破先生と北アルプス山麓

石沢　清

白馬野平

不破先生

北ア山麓を描く

不破先生は画家としての五十余年間に、信州各地はくまなく歩かれ、写生されておられる。北アルプスに添った地帯にもよく来られているのだが、昔から人気のあった上高地とか安曇野より、当時はそれ程に言われていなかった大町市郊外の仁科三湖辺から白馬方面がかなり好きだったようである。

二十歳代から足を運んでおられて作品も多いはずだが、私などが美術展等で信州の作品をみるようになったのは戦後のものである。

戦後、白馬山麓で、先生が率いる日本水彩画会主催の講習会や写生会が何度か行われている。

ある年の写生会の折り、石井鶴三先生、水野以文先生などと講師をされていたのだが、全国各地からの参加者が地元出身の私たちに写生適地などを聞くのだが…。先生は私たちよりも知っておられ、かなりの山地の集落から民家を配する景とか、白馬連峯が遠望できて流れの入る構図などを説明され、参加者を連れて行かれたりもされた。

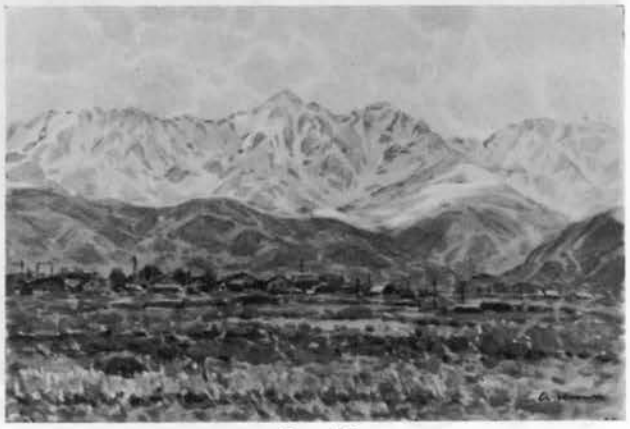
私たち地元のものが、逆に構図面からの適地を教えてもらうほどだった。

晩春から夏の緑のころは難しいと、やや敬遠気味の画人が多いのだが、先生はこの萌えたつ緑のころもお好きなようで、暑い日中の陽の下、草いきれの中で描いておられ感じ入ったものである。

画人の多くは北アルプス山麓に来ると、岳に登って描いたり、山岳を正面に据えた作品が多いのだが、先生は人々の生活の場とか田畑、農家などをよく題材にされておられる。

画人に余り描かれない、高い岳の入らない木崎湖の北辺の海の口駅前から何枚か描かれたことがあったが、その年の一水会展にみずみずしい大作「山湖」として出品され、話題だったことを覚えている。（この絵は久羅夫人から大町市へ寄贈されてきている）

写生会などで全国から集まる参加者は、なつかしさもあり意気も合って、どうしても前夜呑みすぎて、翌朝は二日酔い気味でいるのに、先生は自身の就寝時間には床に入り、翌早朝の六時前から画架を立てておられた。



白　馬

信濃四谷

不破章先生（ふわあきら）　（1901～1979）　東京出身

日展会員　日展審査員　一水会常任委員　一水会審査員

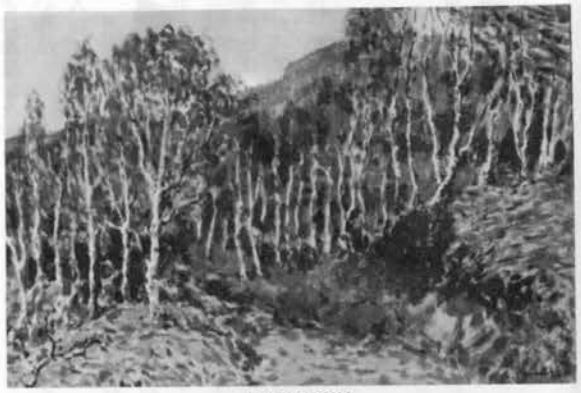
日本水彩画会理事長　日本水彩画会審査委員長

石井柏亭に師事　　外遊6回

賞　日展特選　岡田賞　他　　勲四等瑞宝賞

遺作展　（1981　読売新聞社主催）

著書　水彩入門（保育社刊）　不破章画集Ⅰ・Ⅱ



志賀高原（秋）

松本平初夏（崖の湯）

私ごとだが、一水会、日本水彩画会、日展と所属が先生と同じだったことから、年間にはかなりお会いする機会があったが、作画への姿勢、態度はつねに同じだった。

写生会、講習会などでは、強くどう、こうと指導するのに接した記憶はなかったが、参加者と同じところに画架を立てられ、この中で学べるものがあるなら「くみとれ」ということではなかったかと思われる。

したがって、制作過程を側に立って見ていても気にする様子はなかったように思っている。（講習会、写生会だったからかもしれないが―）。それから、自分の画風を習わせるということもなかったのではないかとも思っている。身辺に集まる人たちが尊敬し、その作風に感動する余り、自然にそうなっていったのではないかと思うのだが。（私は門下生でなかったので申されなかったのかも知れないが）

私などは先生とは全く逆の、厚く塗り上げ、アクリル系のえのぐで描いているのだが、自分の方法で押し通せと励ましてくださることが多かった。

私の師は、安井曽太郎門下の逸材と言われながら、一切の画壇的地位をすてて突然野に下った元一水会委員の奥田郁太郎先生だが、不破先生は時々話題にされた。話の端々から、尊敬の念は大変なものだったと感じとれるのだった。

ある時、「君はいい先生につかれている。あの方は立派な方だ―。」と、奥田先生の作画態度、清廉な私生活なども言われた。

不破先生の遺言

不破先生がご病気（ガン？）で入院されていることは、限られた人しか知らなかったようであった。ご逝去と言われて私などはびっくりしてしまった。

一水会展などに出品予定の作品何枚かを持って、土曜日の授業を終ってから夜行列車で上京したことがかなりある。

私の場合、出品作を選定していただくことが主で、先生にみていただいて出品作を修正する時間はなかった。信州からの夜行列車は、新宿に五時前後に着いてしまうから、先生のお家にはどうしても六時前に着くのだが、先生はアトリエに通ずる玄関の鍵は外してあり、三階のアトリエに静かに登っていく。先生は起床されていて、絵を描いておられたりした。美術館へ行くのには早すぎるので、話し込んでいるうちに朝食時間になる。先生はご自分で階下へ下りていかれて朝食を運んで来てくださるので、いつも恐縮してしまった。

先生の透明画法による作品に対して、アクリル系で描く逆の仕事のはずの私に対して、そのことで一言もおっしゃらず、一水会員になった年から日展への出品もすすめてくださり、今日にいたっているのである。

ご家族は、先生の病気については秘しておられたと思われるのだが、奥様にお伺いすると、ある日、病床横に奥様を呼ばれ、描きためてこられた作品の内、二百余枚について「自分の死後、焼きすてるように―」と厳しく遺言されたとのことであった。

先生の、自分の死を感じ取っての画家らしい遺言だったのである。

これらの作品群の中には、画商その他から求められたものもかなりあり、各種美術展な

上高地坂巻温泉

信州大町（信濃春雪）

どに出品した作品もあり、ご家族の目にもよい作品もあったとのことであった。（久羅夫人は、日本水彩画会会員、一水会所属）

逝去後、いろいろ考えるところもあったが、遺言に従い、お嬢さんともども涙しながら何日もかかって焼却したとのことであった。

「気にかかる作品は後世に残さぬ―」とする行為は、巨匠の伝記等で聞いたことはあったが、現実の身近な人での例は私にはなく、深い感動でした。

先生の作品の行くえ

先生の逝去後、読売新聞などの手で盛大な遺作展が開催された。これは美術誌などでも大きく取り上げられたりした。

信州木崎

しばらくして、奥様にお会いした折り、「先生のお作はどうなさるのでしょう―」とお聞きしたところ、「不破の作品を愛してくれる公共施設などがあれば―」と言うことで、すでに千葉県立美術館に寄贈されているということだった。

私は急いで帰省し、芸術全般に関心が強く、県会議員当時に県の美術品収蔵や、購入に力を入れてもいた高橋大町市長に「不破作品の寄贈が可能」のことを伝えた。

数日後、高橋市長ともども不破宅をお訪ねした。

久羅夫人は心よく応じてくださり、日展出品作三点、一水会展出品作七点、日本水彩画展出品作五点、日加交換展出品作一点を含む二十三点の寄贈を受けることになった。

折りよく大町山岳博物館が新築され、特別展示室もあることから、まとめて展示することも出来ることとなった。

各マスコミはこの評価一億四千万円余の絵画寄贈を大きく取り上げた。

後日、市では久羅夫人を特別表彰することを決したが、来市された夫人は、不破先生の師であり、日本画壇の巨匠石井柏亭先生の作品で、巨匠が画家としての第一歩をふみだすキッカケとなった作とも言われている「脇息による女」を持参し寄贈された。

この作は、生前、不破先生が座右に置いて離さなかった絵画で、美術書にも紹介されているものであった。

市は恐縮して拝受した。

不破作品は、前記千葉県立美術館、大町市長野県立信濃美術館のほか、山梨県立美術館広島県立美術館、台湾のタイペイ美術館にそれぞれ三点から十点ほど贈られているとのことである。

すべて寄贈された久羅夫人とご家族の美挙に感銘の声が高いのである。

（日本水彩画会評議員　一水会会員
日展所属　　大町市在住）

※大町市寄贈二十三点のうち当館では十八点前後を常設展示しています。

夫、章展にあたりまして

不破久羅

この度は御地にて不破章展を開催いたし下さいますとの事、私はじめ親族一同深く感謝いたして居ります。

主人も天国にてどの様に喜んで居る事でせう。主人が一番愛して居た地の「文化の高い所、人情の厚い地、そして風光の美しさ」を私に話してくれ、昭和四十三年頃か新聞広告に農家の売家があったので買いたいと思い私と共に見に行きましたが、住める様な状態でないので買えなかったです。

貴県にはよき友が沢山おいでだし、御地を故郷の様に思って居りましたので、私も主人と共に幾度か御地を訪れまして思い出多い所とて、是非この催しに参加させて頂きたいのですが、歩行が思う様でなく伺えないのが残念です。かわりに娘一家が参りますのでよろしくお願い申し上げます。

（故不破先生夫人　日本水彩画会会員
一水会所属　　在東京）

※写真掲載にあたり

不破先生肖像写真は大町市寄贈作品の当館への展示に際して久羅夫人がご提供くださったものを使用しました。また、2P以下の各写真は信濃美術館からお借りしたもので、すべて本展出品作です。

（編集部）

『不破章水彩画展』は7月19日～8月23日まで開催いたします。皆さまおさそいあわせのうえご来館ください。

（期間中無休　通常料金）

千曲川（小海羽黒下）

山と博物館第32巻第7号
一九八七年七月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL22〇二一一
大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町
大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）